

「茨城の民俗遺産による地域活性化プロジェクト」

(行政側) 茨城町教育委員会 生涯学習課

田口 眞一

(大学側) 茨城大学人文社会科学部・教授

杉本 妙子

連携先

茨城町教育委員会 生涯学習課
茨城町おはなしの会しらゆきひめ

プロジェクト参加者

杉本妙子 (茨城大学人文社会学部教授 企画・立案・講話・大学側実施責任者)
田口眞一 (茨城町教育委員会生涯学習課長 事業担当責任者)
栗原和紀 (茨城町立図書館長 担当:企画)
飯島千津子 (茨城町立図書館係長 担当:企画・広報担当)
渡辺奈緒子 (しらゆきひめ代表 担当:企画・広報)
藤枝安子 (しらゆきひめ 担当:立案・企画・調査)
青木いづみ (しらゆきひめ 担当:講演会・広報・調査)
藤枝豊子 (しらゆきひめ 担当:紙芝居作成)
三浦京子 (しらゆきひめ 担当:講演会)
川澄敬子 (しらゆきひめ 担当:講演会)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

茨城県は、耕作に適した広い平野と鹿島灘・常磐沖等の豊かな漁場に面するという地理的条件に恵まれている地域である。その県の中央に位置する茨城町は県都水戸市

に隣接し、潤沼を有し、農業も漁業も盛んな恵み豊かなまちである。そのような茨城町では、地域の暮らしにまつわる多様な伝承や風習、食文化、方言等が伝わっており、それは地域の民俗遺産ともいうべきものである。しかし残念ながら、昨今の高速道路整備、企業誘致、宅地開発が進むなど、地域の環境は急速に変化している。そのような環境変化や核家族化、また地域の民俗の担い手の高齢化により、継承されてきた地域の民俗遺産は消失の危機に向かっていると考えられる。そしてこの状況は、茨城町のみならず茨城大学を抱える水戸市をはじめとする全県的な地域課題であろう。

そこで本プロジェクトでは、地域の民俗遺産ともいうべき伝承・風習・食文化や方言に着目し、それらを活用した地域活性化につながる取り組みを、モデルケースとして茨城町と連携して行う。地域での世代間交流や次世代への地域文化の継承を目指した地域の活性化を促すとともに、地域の民俗遺産に対する再認識・再評価につなげることを目的とする。

②連携の方法及び具体的な活動計画

1) 地域の民俗遺産を保持継承・活用するために、聞き取り調査にもとづいて地域の民俗を記録・保存する。記録・保存は、学校教育や生涯学習での地域理解・地域学習に活用できる資料としてまとめる。調査は茨城

大学側は杉本妙子、茨城町側はボランティアグループおはなしの会しらゆきひめ（以下「しらゆきひめ」）が行う。

2) 地域の伝承について、子どもを含む幅広い世代が手軽に触れたり理解したりできるように、しらゆきひめが紙芝居、カーテンシアター（紙芝居を布製にし、カーテンのように引きながら演じるもの）を作成する。

3) 上記の取り組みの成果物等を利用して、茨城町行政側を中心に地域理解・地域学習のための講座を、地域住民のみならず広く県民に対して実施する。

上記取り組みにより、地域の人々が地元の豊かさを再認識・再評価することになり、地域活性化が図れると考えられる。また、本プロジェクトのモデルケースとしての茨城町の成果を、水戸市をはじめとする他地域へも広めることにつなげるため、講座動画を茨城町公式 YouTube チャンネルで配信することを検討する。

③期待される成果

学校教育や生涯学習での地域理解・地域学習において、聞き取り調査をした民俗の記録・保存の資料が幅広く活用できる。茨城方言で伝承を紙芝居にすることにより、小中学校等では副教材として活用でき、大人世代に対しては地域の民俗の再認識・再評価につなげる素材になる。このことにより地域での世代間交流や次世代への地域文化の継承・地域の活性化が促され、茨城町らしい豊かな土地柄を再認識することができる。

また、作成した紙芝居を県内公立図書館

や読み聞かせ団体に寄贈し、地域の魅力の発信と地域文化の活用の方策を具体的に提示するとともに、茨城県民の民俗遺産に対する認識の向上につなげる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

1. 地域の民俗を聞き取り調査にもとづいて記録・保存（本プロジェクト期間外を含む）

<聞き取り調査>

1) カップレもち

2014年 T家に伝わる「カップレもち」の伝承の聞き取りを行い、しらゆきひめが昔話として再話。

2015年 T家の郷土料理、伝説、風習を杉本としらゆきひめが聞き取り調査を行った。

2022年 本プロジェクトとして、T家において再調査を行う。



写真1 2022年T氏再聞き取り

2) 珠数繰り

2022年4月、聞き取り調査を下石崎遠西地区の寮（行事などを行う建物）で行った。現在も毎年2月15日に地区の女性が寮に集まり、鎌倉時代から伝わる仏像の前で、長さ6メートルの大珠数の輪を回しながらご真

言を唱え、身体 の健康等を願う。



写真2 珠数繰り

3) 町内各地の風習・言い伝えの調査

続いて下土師地区、野曽地区、川根地区、海老沢地区、秋葉地区を調査し、現在も行われている風習や途絶えてしまった言い伝えなど貴重な話を26名から聞き取り、映像と音声で記録した。

<茨城町に伝わる郷土料理>

・つとどうふ

茹でた木綿豆腐を藁つとの中に入れ、藁で固く縛り半日置くと藁の形がついた「つとどうふ」ができる。これを甘辛く煮て冠婚葬祭などで振舞う。

・のっぺ

里芋が取れる秋になると「のっぺ」を作る。根菜類を薄味で煮て片栗粉でとろみをつけたもので、寒い時期の副食となる。

・ひしょう（醬）

小麦麴で作る発酵保存食である。秋にねかせ、春先になっておかずが少ない時に食べるほか、調味料としても利用する。地域によっては茄子や胡瓜の古漬けなどを混ぜて食する場合もある。

2. 地域の伝承を紙芝居等にし、地域理解や

地域の民俗の再評価等のために活用

旧暦12月1日の水神様への「川浸しもち」は関東のみならず、広く行われていたが、それに茨城町T家に伝わる話を再話し紙芝居化した。

<紙芝居の作成>

T家ではカップレ餅（かつては、茨城町のどこでも行なわれていた）の風習を継承しており、その貴重な生きた民俗の取材は、紙芝居作成への大きな足掛かりとなった。

T家の伝承にある鹿島屋という造り酒屋は現存しない。町の資料にも記載がなく、舞台となる鹿島屋の外観など、多くが不明瞭であった。そこで、絵に描くにあたり、伝承をもとに推測し、時代考証を江戸時代に設定した。茨城県立歴史館、笠間市立図書館にて、①酒屋の外観、②餅つきの道具、③人物の立場や役割がわかるような着物や着物の柄等、④橋の外観、⑤伏見稲荷大社、⑥御札の祀り方などの資料を参考にした。カップレ餅の絵は、多くの人に親しんでもらえるよう可愛らしい容姿とした。



写真3 「カッパレもち」紙芝居表紙

脚本はT氏から聞き取りをした「カップレ餅」の再話をもとに紙芝居用に脚色した。

台本は茨城方言と共通語の両方を掲載し、どちらでも楽しみながら風習を理解できるよう工夫した。地域文化が紙芝居の絵と言葉によって観客に伝わり、茨城町の民俗の継承につなげることができた。



写真4 完成したカーテンシアター

<紙芝居の活用>

紙芝居「カッパレもち」による小、中学校での読み聞かせを行った。脚本の言葉は共通語と茨城方言どちらが良いか、児童・生徒に聞いてから紙芝居を披露したが、茨城方言でのリクエストも多く、小学校1年生でも充分内容を楽しめたようだった。



写真5 小学校授業での紙芝居紹介

3. 地域理解・地域学習のための講座の実施

<講座の実施>

2022年11月27日（日） 主催 茨城町

生涯学習課 しらゆきひめ

「むがーし むがし お国言葉で語っぺよ」を茨城町役場駒場庁舎で開催した。

以下、プログラムの中のいくつかについて具体的に報告する。

・「昔話の中の茨城方言」（茨城大学・杉本）というテーマで、昔話の方言をもとに、茨城方言の特徴を説明した。また、次のような講話を行った。

方言は地域の暮らしを構成する重要なものであり、地域の文化だといってもいい。方言は生活語として日常的に使われることが減少しているが、方言が欠かせない昔話とその語りといった形で継承していくことの可能性や重要性を説明した。



写真6 講話

・「聞き取り調査」の報告として、しらゆきひめが行った聞き取り調査の動画をスクリーンに投影し、現在も受け継がれる珠数繰りや子安講などを語り手の音声を中心に紹介した。また、地元の伝説や関連する笠間市の伝説などを茨城方言で語った。



写真7 慈雲寺に纏わる伝説の語り

- ・紙芝居「カップレもち」をプロジェクターで投影し、語りを方言で披露した。
- ・「茨城弁ミニ講座」では、人情の機微などを表す豊かな方言を、親しみやすいコミュニケーションツールとして利用した方言ミニ講座を行った。これによって、方言は暮らしに密接しており、地域の人間関係を強く結び付ける役割を備えていることを示した。



写真8 茨城弁ミニ講座

<長生大学での講座>

1月26・27日 「茨城のむかしを語ろう」茨城町生涯学習課主催
高齢者の生涯学習の場である長生大学で、しらゆきひめが講師となり講座を担当した。
茨城町に伝わる行事の紹介や土地言葉による昔話、カップレもちの紙芝居を披露した。

②プロジェクトの達成状況

本プロジェクトで計画したことの全てを、十分な成果を持って達成することができた。これは、大学側と連携先の茨城町教育委員会・お話の会しらゆきひめとの間で、良好な

協力関係を築くことができたことや、関係者がそれぞれの立場でなすべきことや出来ることに意欲的に取り組んだことによる。また、本プロジェクトによって大学と茨城町（行政、町民）との連携分野を拡大できたことも、成果の一つであろう。

本プロジェクトの具体的な達成状況については、令和4年11月27日に開催した講座「むがーし むがし お国言葉で語っぺよ」において、プロジェクトの成果の公開を行っているの、このイベントの実施状況と成果を述べることで、達成状況の報告とする。なお、このイベントの具体的な実施内容については、上述の「講座の実施」で述べたので、ここでは省略する。

本プロジェクトで実施した「むがーし むがし お国言葉で語っぺよ」には、コロナ禍の中にもかかわらず73名もの参加があった。

参加者は茨城町の高齢者のほか、他県や県内他地域から読み聞かせボランティアも多く参加した。今回の講座で地域に根差した文化の現状を発信し、民俗遺産の理解を深め、次世代への伝承の足掛かりとなった。講座参加者へのアンケートでは、地域文化の伝承・保存の必要性について肯定する回答が大多数で、「必要がない」と回答した参加者はいなかった。そのほか、感想として、「講話の茨城の地理的位置からくるその役割と方言との関係が面白い、お国言葉の語り部に癒された、方言だからこそその原風景が見えた」などの多くの好評価を得られた。この講座の動画は茨城町公式YouTube「いばちゃん」で公開中である。

<https://www.youtube.com/channel/UC7Ppp3JTB-hTKBoCAcqNc9Q/videos>

③今後の計画と課題

聞き取り調査をまとめ、資料集として小冊子を作成し、町の図書館ほか、近隣市町村立図書館に寄贈し、茨城町の魅力の発信と永年保存の郷土資料としての活用を見込む。小冊子の内容としては、茨城町の伝統食、年中行事や禁忌、講中、地域に伝わる伝説の再話を盛り込む予定である。この小冊子は、学校での授業等において活用してもらうため

に、町立小中学校へも配布する。これにより、子どもたちはこれまで知らなかった地元のいろいろな伝統文化等に触れ、地元で愛着を感じることができたり、地域の文化に関心が高まったりと、若年層への文化継承が期待できると考えられる。しかし、授業での活用を実施するためには、学校の協力や学校と本プロジェクト関係者等との連携が欠かせない。実施に向けた具体的な方策については、今後の課題である。

しらゆきひめは、幼稚園や保育園、小中学校の朝の読書時間に読み聞かせを30年行っている。その読み聞かせの時間に茨城方言を交えた紙芝居や冊子を活用し、次世代への地域文化の伝承を幅広く進めていく。現在、しらゆきひめは県内6市町村の昔話の語り手団体と定期的に勉強会を開催しているが、さらに若手メンバーの育成に努め、方言昔話の情報共有を行い、それぞれの団体の各地元での活動に協力していく。

本プロジェクトに関連して、茨城県立歴史館から民俗遺産に関する企画(2023年度)の依頼があり、茨城町の伝承や風習の映像・伝説の語りを行うとともに、近隣市町村の伝説も紹介していく。この企画では、夏休みに親子参加の講座を実施することが計画されており、そのような機会に、参加者一人ひとりの地元への関心と子どもたちへの地域文化の継承につなげていきたい。

本プロジェクトで注目した地域の方言・昔話や民俗については、古いもの、時代とともに消えていくものと思われがちだが、これらは形にしにくいものであるだけに、継続的な保存や継承の取り組みなしには、後世において、地域文化に接することも復元することも難しくなると思われる。このような課題に対して、継続的に様々なイベントに積極的に参加したり、自らも企画したりして、近隣市町村の伝説や昔話などを紹介して、幅広い世代に知ってもらうための活動を行っていきたい。また、活動の継続のためには、次世代の活動の担い手の育成も欠かせない。上述のしらゆきひめの活動でも述べたように、他団体との情報交換を継続したり、また県内外での若手育成の成功例に学ぶなどしたりしながら、この課題に取り組んでいくことにより、各地域での活動の広まりを期待する。